

シェイクスピアの『お気に召すまま』における黄金世界としてのパストラル世界の変容—「食事療法本」の観点を援用して

内藤 亮一¹

Transformation of the Pastoral World as the Golden World in Shakespeare's *As You Like It* through Dietaries

Ryoichi NAITO

Email: naitoh@edu.u-toyama.ac.jp

キーワード: シェイクスピア, パストラル, お気に召すまま, 黄金時代, 食事療法本

Keywords: Shakespeare, Pastoral, As You Like It, the golden age, Dietaries

本稿はシェイクスピアの『お気に召すまま』(*As You Like It*)におけるパストラル世界(アーデンの森)の様相を、劇中で言及される「黄金世界」のイメージとの関係で考察し、劇中において、そのパストラル世界のイメージが変容していくことを明らかにする。またジェイクイーズ(Jaques)の憂鬱を食事療法本の知見を援用して考察し、ジェイクイーズの公爵及びアーデンの森の「黄金世界」的イメージへの批判が妥当なものかどうかを明らかにすることを目的とする。

1 変容するアーデンの森: 最初の4段階

パストラルが虚構の世界を歌う形式であることは、そもそもの成り立ちから周知の事実である。宮廷人が喧噪な宮廷を離れ、田舎で羊飼いのように牧歌的世界に遊び、無垢な世界から宮廷の墮落を批判するのが、ギリシャからのパストラルという文学ジャンルである。

『お気に召すまま』で、宮廷から森に逃れてきた元公爵の生活がそのようなパストラルの伝統を想起させることが、まずは1幕で武骨な力士チャールズ(Charles)によって述べられる。

CHARLES. They say he is already in the Forest of Arden and a many merry men with him, and there they live like the old Robin Hood of England. They say many young

gentlemen flock to him every day and fleet the time carelessly as they did in the golden world. (1.1.109-113)¹

公爵たちはロビン・フッドさながらの生活で、「黄金世界」に住んでいるかのように、何もわずらうことなく過ごしている、という噂がある。「黄金世界」というのは Arden 版の注釈者 Dusinger は“a time of eternal spring and innocence without labour or laws.” (1.1.113n)と述べ、Ovid を参照せよ、となっている。Oxford 版の注釈者 Brissenden は、Ovid への言及であることを前提に、「黄金時代」では労働も獣の殺害もなかったことに言及し、Virgil の『牧歌』(*Eclogue*)に倣い、パストラルの作者は、羊飼いの素朴さとここにあるような牧歌的生活を結びつけたことを指摘する。さらに公爵たちが、実際の生活はそれとは異なっていることを知っていること付け加えている(1.1.113n)。ここで注目すべきは、公爵たちが逃げ込んだアーデンの森が最初に紹介されるときに、あたかもそこが Ovid の無垢な「黄金時代」のようなどころで、伝統的なパストラル世界の間であるかのように紹介されていることである。そして、その紹介が、武骨な力士が散文で語る間接的な報告によるため、どこまで本当かわからない、噂話ということである。実際、それは現実とは異なっている。しかし、それは完全な間違いとは言えない。黄金時代のイメージはアーデンの森につきまとう。Dusinger が Arden 版の序文で言うように、Ovid が語る永久の春、法も罰も裁きも恐怖も兵隊もない

¹ 富山大学人間発達科学部

平和な「黄金時代」や「楽園」の特徴はアーデンの森に当てはまらないのかもしれないが、それらは変容して、心のなかの「黄金時代」に存在している(90)。そして、エリザベス朝の人々は処女女王の支配のもとで、自分たちは新たな黄金時代に生きているという神話を鼓舞していた(91)。さらには、Virgilの『牧歌』の正義の処女神アストレア(Astraea)が黄金時代に君臨していたことも、重ねられた(91)。エリザベス朝の人々は、たとえ現実が黄金時代ではないとしても、そのような世界を夢想し、そこに生きているつもりでいた。『お気に召すまま』の森は、黄金時代と重ねられることで、エリザベス朝人が夢想するのと同じく、実際はどうあれ、黄金時代の理想を想起する場所として設定されているといえよう。そのことは、同時に、現実とのギャップを常に変容させて、理想を保つことを要求されるような場であることを示している。公爵自身の言葉が、そのことを明確に語っている。

それでは、公爵自身がどのように語っているかを見てみよう。

DUKE SENIOR. Now, my co-mates and brothers in exile,

Hath not old custom made this life more sweet
Than that of painted pomp? Are not these woods

More free from peril than the envious court?
Here feel we not the penalty of Adam,
The seasons' difference—as the icy fan
And churlish chiding of the winter's wind,
Which when it bites and blows upon my body
Even till I shrink with cold, I smile and say
'This is no flattery. these are counsellors
That feelingly persuade me what I am.'

Sweet are the uses of adversity,
Which, like the toad, ugly and venomous,
Wears yet a precious jewel in his head;
And this our life, exempt from public haunt,
Finds tongues in trees, books in the running
brooks,

Sermons in stones, and good in everything.
(2.1.1-17)

ここで描かれている森は、言葉の上では Ovid の「黄金時代」を連想させつつ、同時に、現実にも目を背けず、自然には季節があり、厳しさもあること

を認めている。そして、その神話の黄金時代の理想とは反することも歓迎すべきこととして受け入れ、それを道徳的・倫理的な教えに変えてしまうのだ。具体的に見ていこう。

2行目の“old custom”は、Arden 版(2.1.2n)も、そしてやや控えめに Oxford 版(2.1.2n)もエデンや黄金時代への言及としている。飾り立てた暮らしより、古の飾らない生活のほうがより心地よい。何も気にかけないところは黄金時代の安らぎを感じる。ただ、それは自ら望んだ暮らしではない。実際は、1行目の“exile”とあるように、追放された結果である。だが、今になれば、それはむしろ、墮落した世界からの追放であり、望ましいことである。“exile”と“sweet”が行末で呼応して、そのことを強調する。そして、直前の場面で、追放の身となったロザリンド(Rosalind)と共に森へ行くことに決めたシーリア(Celia)の最後の台詞、“To liberty and not to banishment”(1.3.135)とも呼応している。「追放ではなく自由の身に。」厳しい現実が、アーデンの森では、心地よく、自由なものへと変容させられる。

また、アーデンの森は、チャールズが述べていたよりは、厳しい現実と直面している。ここは、季節のない常春の黄金時代ではない。Ovid にしたがえば、少なくとも季節がある銀の時代である。Dusinberre は、「アダムを受けた刑罰 (the penalty of Adam)」(5)は聖書にしたがえば「労働」であるが、公爵は季節の変化だと主張している、と言う。そこには矛盾があるが、肝心なのは、荒天が宮廷の墮落からのエデン的自由を奪いはしないことであると述べる(2.1.5n)。Brissenden は、公爵が冬の厳しさを受け入れ、これが自己認識に通じるとしている(2.1.5n)。

アーデンの森には、黄金時代と異なり、季節がある(6)。凍えるような冬風もある(7)。だが公爵は自然の厳しさを肯定的にとらえ、次のように言う。自然は宮廷と異なり、へつらうことはしない。そのため、本当の自分を知ることができる。“This is no flattery. these are counsellors / That feelingly persuade me what I am”(9-10)。「汝自身を知れ」というのは、ルネサンス期における重要な倫理的美徳である。この森が再生の機能を持つ理由は、この森で人は自分が誰であるかを知り、生まれ変わるからである。

そして、公爵は「逆境が役に立つことはうるわしいことだ」(12)、と厳しい自然の現実を好ましいものとして受け止め、現実を変容する。

アミアンズ (Amiens) もそれに同調し、意固地な運命も静かに受け入れる公爵を幸せな人と呼ぶ。“Happy is your grace / that can translate the stubbornness of fortune / Into so quiet and so sweet a style” (2.1.18-20). 過酷な現実も、公爵の内面では無害で有益なものに変容され、公爵自身は黄金時代さながらの幸せを享受しているのである。

ただし、このアーデンの森に代表される『お気に召すまま』におけるパストラル世界は、不安定で、すぐにでも壊れてしまう微妙なバランスの上にあることを、直後の台詞が教えてくれる。

DUKE SENIOR. Come, shall we go and kill us venison? (2.1.21)

それまでの英知に満ちた言葉を聞いた後には、あまりにも落差が大きい。「あらゆるものに善を発見する」(17)と言い、アーデンの森を黄金時代のイメージで満たした人が、楽しみに殺害を口にするのは、それまで積み上げた、アーデンの森の美德を破壊してしまうように思われる。さらに戸惑うのは、そう言ったかと思えば、舌の根も乾かぬうちに、前言を否定するようなことを言うからである。

DUKE SENIOR. And yet it irks me the poor dappled fools,

Being native burghers of this desert city,

Should in their own confines with forked heads

Have their round haunches gored. (2.1.22-25)

「まだらの哀れな奴 (dappled fools)」(22)とはもちろん、鹿のことである。“venison” (21)は当時は鹿のみならず、「狩りの獲物やその肉」一般を指したが、公爵の台詞から考えれば、鹿のことがかなり頭にあったと考えてよいだろう。その哀れな鹿が、この森の元々の住人でありながら、お尻に矢を突き刺されることを悩ましく思っているのだ。公爵が狩りに行く“venison”が鹿でないとしても、一方で狩りをしながら、一方で狩りで傷つく動物のことを哀れに思っている。明らかな自己矛盾であり、通常の間心心理ではあることかもしれないが、黄金時代の森においてはありえないことである。また「二股の矢で丸いお尻を突き刺される」という表現に性的含意があることは、Arden 版 (round haunches gored, 2.1.25n), Oxford 版 (forked heads, 2.1.24n) とともに認めるところであるが、憐れみながらも性的冗談を入れるところに、「まじめさ」というものが感じられ

ない。これは、この森が祝祭の森であり、ラブレー的哄笑の場であると考えれば、納得のいくところではある。一方では、逆境にある者に教訓を与えながら、黄金時代の無垢を心に抱かせるが、一方では、矛盾と混沌をそのままにすべてを笑い飛ばす陽気な場所なのである。先に述べた、「自由・放縦」を意味するシーリアの“liberty” (1.3.135) という言葉が、この森のそちらの一面を指している。ついでに言えば、Liberties とは当時のロンドンの劇場など歓楽施設が集まっていたテムズ川南岸の一角を指し、都市と田舎の境界に位置する権力の及ぶか及ばないかあいまいな地域であった(Mullaney viii-ix)。この時、アーデンの森と現実のロンドンの Liberties が観衆のなかで重なった可能性は十分にある。矛盾ということでは、“desert city” (23) という言葉も「人がいない都市」というのは撞着語法であると Arden 版の注は指摘している。森を都市と呼ぶこと自体が、森の属性である無秩序と都市の属性である秩序が衝突している。

このように、黄金時代の趣を残しながら、いたるところでほころびが生じているこの森の最大の問題点が、“native burghers” (23)である鹿から、公爵たちが篡奪した点にある。それは、公爵自身が弟に地位を奪われて、追放の憂き目にあつて森に来たからである。公爵がしていることは、されたことと同じなのである。その点をジェイクイーズが深く嘆いていることが貴族 1 によって告げられる。

1 LORD Indeed, my lord,
The melancholy Jaques grieves at that,
And in that kind swears you do more usurp
Than doth your brother that hath banished you.
(2.1.25-28)

... swearing that we
Are mere usurpers, tyrants and what's worse,
To fright the animals and to kill them up
In their assigned and native dwelling-place.
(2.1.60-63)

公爵は、先住民である動物たちを殺していることで、ただ公爵の地位を篡奪して、彼を追放しただけの弟よりも悪いのである。

こちらの視点から見れば、チャールズが 1 幕で最初にオリヴァー(Oliver)、および観客に報告していたアーデンの森の「黄金世界」のイメージは崩れ去っ

てしまう。ただし、そこでもチャールズは、“Robin Hood” (1.1.111)のイメージを提示していたのであるから、鹿狩りは予想されていいことである。ただ、Arden版もRobin Hoodが民衆の英雄で、他のRobin Hood劇でこの劇と同様に、腐敗した宮廷を批判するためパストラルの舞台が利用されていることを指摘するに留まり(1.1.111n)、Oxford版も、民衆の英雄であり、宮廷に対して安逸で平和な生活をしている緑の森の概念を確立したものとして注をつけている(1.1.111n)。このことは、逆に、アーデンの森が最初、どのような場所として受け手の側に提示されているかということを示している。

だが、アーデンの森のイメージは劇が進むとともに変容を迫られる。チャールズの素朴で単眼的な視点から見られたアーデンの森は、第一に「黄金時代」を象徴するような理想の場所として観衆に提示される。チャールズはRobin Hoodも黄金世界も、同じような世間の煩わしさから離れた生活の喩えとして、アーデンの森を提示する。それゆえに、観衆もアーデンの森をそのような理想郷としてとらえる。アーデンの森はいかにもパストラル世界にふさわしい桃源郷として示され、それ以上に踏み込んだ解釈はされないのである。これはシェイクスピアが故意にチャールズという素朴な人物に語らせ、アーデンの森の宮廷との対比を示すためだったと考えられる。同時にそれはエリザベス朝の人々が自らの時代に抱いていた神話世界でもあった。しかし、そのあとで、現実のアーデンの森の姿を公爵自らが語り、アーデンの森の自然の過酷さが語られる。最初に提示された黄金世界のイメージは、現実にある場所としては消え去るが、穏やかに過酷な運命を受け入れることで、公爵の心の中に黄金世界のイメージがつくられる。しかしそれも、公爵自らのふざけた冗談とともに解体され、さらなる変容を遂げる。ジェイクイーズの視点から見たアーデンの森は、侵入者たちによって殺りくが生じ破壊された黄金世界である。Ovidの言う4つの時代(Ovid 34-36)に例えれば、チャールズが黄金時代を提示し、公爵が四季のある銀の時代と弓矢という残忍な武器を手にした銅の時代を提示し、最後にジェイクイーズが動物たちを殺害し、森を略奪した鉄の時代を提示する。

ここまで、黄金世界のイメージを中心に、『お気に召すまま』におけるパストラル世界(アーデンの森)の変容を見てきた。もちろん、アーデンの森はこれ

で終わるわけではない。その後も、劇の進行とともに、黄金時代を取り戻したり、鉄の時代を想起させたりと変容を繰り返しながら、最後は、結婚の神ハイメン(Hymen)の登場とともに、黄金時代に近い様相を提示して終わる。

それでは、そこに至るまで、この『お気に召すまま』におけるパストラル世界がどのような変容をさらに遂げていくかを見ていくこととする。

ただし、ここではこれまで見てきた黄金世界のイメージを中心に見ていきたい。『お気に召すまま』の主人公は、ロザリンドとオーランドー(Orlando)であり、2人の恋の舞台がアーデンの森であるが、本稿では、黄金世界としてのアーデンの森により焦点を当てるために、このあとも、ジェイクイーズと公爵に焦点を当てて、アーデンの森の特質を考察したい。

2. ジェイクイーズの憂鬱

2幕5場になって、初めてジェイクイーズが登場する。初めての登場で披露するのは歌である。先に歌うアミアンズの歌は、2幕1場で公爵が心中にある黄金世界を想起させたものに近い。

AMIENS. Under the greenwood tree

Who loves to lie with me

And turn his merry note

Unto the sweet bird's throat,

Come hither, come hither, come hither!

ALL. Here shall he see no enemy

But winter and rough weather. (2.5.1-5)

緑の樹下で鳥のさえずりに合わせて歌い、ともに寝転ぶのは、典型的なパストラルの光景であり、冬の天気以外には敵はいない、というのは自然の厳しさを受け入れる準備もある、ということである。しかし、ジェイクイーズは歌を所望しながらも、牧歌にはふさわしくない表現で答える。“I can suck melancholy out of a song, as a weasel sucks eggs” (2.5.10-11).歌から得るのは憂鬱で、それも害獣であるイタチが卵を吸うようにということなので、アミアンズは歌を歌うのを断る。だが、結局ジェイクイーズはむりやり歌わせた上に自らも歌う。

JAQUES. If it do come to pass

That any man turn ass,

Leaving his wealth and ease

A stubborn will to please,

Ducdame, ducdame, ducdame!

ALL. Here shall he see gross fools as he,

An if he will come to me. (2.5.44-50)

愚かにも、富と安楽を捨てて、頑なであれば、私のような愚か者に会える、とひねくれた歌を歌う。これは己を知る、というよりはアミアンズの牧歌世界を壊し、攻撃しているようにみえる。ジェイクイーズの批判の矛先は自分にというよりは、他人に向かう。自らが愚かであると知っていることを自慢し、他人はそれを知らないと馬鹿にしている。ジェイクイーズが自らを愚か者と思っているかどうかは、3幕でのオーランドーとの会話の中でみられる。

JAKUES. You have a nimble wit; I think 'twas made of Atalanta's heels. Will you sit down with me? and we two will rail against our mistress the world and all our misery.

ORLANDO. I will chide no breather in the world but myself, against whom I know most faults. (3.2.268-273)

ジェイクイーズはオーランドーの頭の回転のよさに、一緒に世間の悪口をまくしたてよう、と誘う。賢い自分と同等と認めたからである。しかし、オーランドーのほうが、悪口は言いたくない、愚かなのは私だ、と謙虚に語る。さらには、愚か者を見なければ、川を覗けばよいとジェイクイーズに皮肉を言って早々に切り上げようとする(3.2.277-282)。4幕1場でロザリンドとの会話では、もっと手厳しいことを言われる。ロザリンドはジェイクイーズの極端さを批判する。

ROSALIND. Those that are in extremity of either are abominable fellows, and betray themselves to every modern censure worse than drunkards. (4.1.5-7)

パストラルのジャンルにおいて批判的精神は必然であり、内在しているものである。素朴な羊飼いの仮面の下で宮廷を批判することなしにはパストラルという虚構のジャンルを取る意味は弱まってしまう。しかし、行き過ぎたバランスの取れていない批判はパストラルの甘美さを損なってしまう。ジェイクイーズは基本的には当時のいわゆる「不満分子」(malcontent)であり、通常パストラルの世界からは受け入れられない。また、オーランドーから“Monsieur Melancholy” (3.2.286)と、ロザリンドから“a melancholy fellow” (4.1.3)と呼ばれているように、ジェイクイーズはこの劇で、「憂鬱」

(melancholy)のシンボルであり、「喜び」(mirth)の反対としての存在である。先の場面で、アミアンズは付き合いきれないとばかりに、ジェイクイーズを置いて、公爵に「宴(banquet)」(2.5.55)の準備ができたことを知らせに行く。

それでは、このジェイクイーズの毒舌的「憂鬱」はこの劇において、黄金世界としてのパストラル世界にどのような影響を及ぼすだろうか。なぜ、ジェイクイーズは憂鬱なのだろうか。もちろん、ジェイクイーズはある程度、アレゴリーとしての憂鬱の擬人化である。それが、彼の役回りと言ってしまえば、それまでである。しかし、この森における黄金世界との関連で考えた場合、彼の憂鬱の原因は問題である。つまり、この森では鹿狩りは肯定されているかどうか、ジェイクイーズの公爵への篡奪者という批判はどこまで妥当なのかということである。黄金世界では肉を食べず、自然を耕すこともなく、食べ物が手に入る世界だが(Ovid 34)、アーデンの森の鹿狩りは明らかにこれと矛盾しているからである。ジェイクイーズの批判が正しければ、アーデンの森の黄金世界のイメージはかなりの部分で傷ついてしまう。このことについて、ジェイクイーズの憂鬱と肉食の問題を、当時の食事療法本(Dietaries)の知見を活用して考察してみたい。

3. 憂鬱と肉食～当時の食事療法本から

2幕7場の冒頭で、公爵はジェイクイーズがどこへ行ってしまったのかと聞く。そして、獣に変わってしまったかどうかと軽口をたたく。

DUKE SENIOR. I think he be transform'd into a beast;

For I can nowhere find him like a man. (2.7.1-2)

ここにはもちろん、アクタイオン(Actaeon)神話へのあてこすりがある。アクタイオン神話とは、狩りの最中に女神の水浴を見てしまったために、鹿の姿に変えられ、自分の猟犬にかみ殺される、という有名な神話である(Ovid 97-102)。自分を批判するジェイクイーズに対する皮肉である。そこには、ジェイクイーズも褒められた人物ではないという含意が含まれる。実際に、公爵はジェイクイーズが酒池肉林におぼれていた(a libertine)ことを指摘している。

DUKE SENIOR. Most mischievous foul sin, in chiding sin;

For thou thyself hast been a libertine,

As sensual as the brutish sting itself;
And all the embossèd sores and headed evils
That thou with license of free foot hast caught
Wouldst thou disgorge into the general world.
(2.7.64-69)

現在のジェイクイーズの憂鬱や世間に対する毒舌は、かつての獣のような悪癖がもたらしたものと非難している。それでは、公爵の言うことは本当なのだろうか。

当時の食事療法本を見ると、肉食が憂鬱に悪いということが出てくる。まず、当時の食事療法本とは何かを説明する²。

近代初期英国においては、多くの食事療法や健康に関する本が出版され、Ken Albalaによれば、1470年代から1650年にかけてヨーロッパ各国で再版、改版、翻訳された(28-34)。Albalaはこれを3つの時期に分け、第2期のはじまり、1520-30年ごろまでには、ギリシャのガレノス(Galen)(2世紀)の4体液論の影響を受けたものが主流になるとする(72)。16世紀後半の第3期になると、ガレノスの理論に自分たちの見解を加えるようになり、17世紀中頃に入ると消化と栄養の新しいモデルである発酵説の登場とともに、体液論は廃れていく(117)。

ガレノスの体液論では、人間は4つの体液、血液、黄胆汁、粘液、黒胆汁(blood, choler (yellow bile), phlegm, and (black) bile)に熱・湿・冷・乾(heat, moisture, coldness, or dryness)が組み合わさり、各体液のバランスによってその人の性質(complexion)が決まる。それは食事・調味料によって絶えず変わり、「食事療法本」では食物の特性が細かく書いてある。たとえば、憂鬱症の人は冷・乾であるので、食事の際もその点のバランスに気を付けることも記されている(Albala 82-87)。冷・乾の人であれば、同じ特性を持つものは避けるべきである。

シェイクスピアの時代は、ガレノスの理論に自分たちの見解を加えた第3期にあたるが、この時代の「食事療法本」の代表的なものの一つとして、人文主義者 Thomas Elyot が、1537年ごろに出版し、その後18回出版された *The Castle of Health* がある。この本は友人のために医者ではない Elyot が携帯用にと書いたものであり、当時の人々が健康に留意していたことがわかる。次の箇所は1595年出版のものからで、鹿について記述している部分である。

Deere red and fallowe.

Hypocrates affirmeth, that the flesh of Harts & Hinds to be ill iuyce, hard of digestion and dry, but yet moueth vrine. Of fallow déere, he nor any other old writer doth speake of, as I remember. I suppose, because there be not in all the world, so many as bee in England, where they consume a good part of the best pasture in the Realme, and are in nothing profitable, sauuing that of the skinnes of them is made better leather then is of Calues, the hūlting of them being not so pleasant, as the hūting of other venery or vermine, the flesh much more vnwholesome and vnpleasant then of a red Déere, ingendring melancholy, and making many fearefull dreames, and disposeth the bodie to a feuer, if it bee much eaten: notwithstanding the fat thereof (as some learned men haue supposed) is better to be digested then the leane.
(43)

Elyot は鹿については、食用も含めて何もよいとことがないと述べている。アカジカ(Harts & Hinds)は消化しにくく、ファロージカ(fallow déere)はイングランドでは世界のどこよりも多く生息するが、何の役にも立たない。皮が仔牛よりましなくらいである。狩りをして面白みがなく、他の野生動物や害獣を狩るほうがおもしろい。肉はアカジカ(a red Déere)より不健康でおいしくもなく憂鬱症を引き起こし、悪夢を見させ、食べ過ぎれば熱が出ることもある。とはいえ、やせている鹿よりは太っている方が消化には良い。

『お気に召すまま』に登場する鹿がファロージカかアカジカかははっきりしない。狩りで傷つきジェイクイーズの同情的となっている、と貴族が言及するのは stag (2.1.33)であり、厳密にはアカジカの雄ということになる。確かに狩りをするなら、こちらになるかもしれない。一方、公爵が、森の元々の住人でありながら矢で射られる運命の鹿のことを嘆き、道化のまだらな服に掛けて「哀れなまだらの愚か者(道化) (the poor dappled fools)」(2.1.22)と喩えるときに言及しているのは、斑点を持つファロージカのほうである。実際のところ、シェイクスピアは, fallow という語を鹿に使っている例はなく, stag が数例, 多くは単に deer である。この劇でも deer が 6 例, stag が 1 例である。シェイクスピア

にとって、鹿の種類は劇作上重要ではなかったのかもしれない。普通のイギリスの森であれば、どちらもいたということであろう。この劇の舞台はフランスだが、実際に観衆の頭のなかではイギリスが舞台になっているのは、他のシェイクスピア劇同様である。いずれにせよ、どの鹿も消化に悪いことだけは変わらない。

鹿について、他の作者はどのようなことを言っているだろうか。

Thomas Moffett も *Health's Improvement* (16世紀後半に執筆され、1655年に Christopher Bennet によって修正と拡大されて出版) のなかで、鹿 (red and fallow deer) について多くを語っているが、肉については意見が極端に分かれると言う。ガレノスは硬くて憂鬱質でロバにも劣ると言い、Roger Bacon は最高の部類で特に消化に良い若いのがよいと言う。プルターク (Plutarch) は不健康な肉といい、涙も塩辛く、冷・乾の性質という。一方エンペドクレス (Empedocles) はすべての涙は熱を持つと言い、これらのその他の意見のなかで Moffett 自身はどちらの側についてよいかわからないという。ただ、彼の述べている中でやはり若い消化の良い鹿が美味であり、また、料理の仕方でも変わるし、食べ過ぎなど食べ方にも注意すべきである。冷たければバターや胡椒などで熱を持たせられるし、本質的には滋養ある食物だとする。そしてまた狩りのことにも触れ、父親同様に若紳士が狩りに夢中になれば、戦争での武勲を立てるのに良い準備ができるということも指摘する。(Moffett, 72-74)

このように鹿の肩を持つ意見もあるが、鹿が冷・乾ということは認めているように、多くの食事療法本の著者は鹿が憂鬱質には不適切であるとしている。

それでは、肉食自体はどのように考えられていたのだろうか。

肉食自体に関する当時の見解は、様々な意見がある。たとえば、残酷さに関する当時の基準として、聖書では、旧約の神はノアに、動くものを食料とすることを認めたが、命ある血のまま食べることは禁じた (But flesh with the life thereof, I mean, with the blood thereof, shall ye not eat.) (創世記 9: 4) とある。シェイクスピアの時代に民間でよく読まれたジュネーヴ聖書 (Geneva Bible) (1560) はそれに関する注釈として、「これは生きているものや絞殺されたものを指し、それによってあらゆる残酷な行為

を禁じている」 (“That is, liuing creatures & the flesh of beastes that are stragled & hereby all crueltie is forbidden” (Gen. 9:3-4 margin.) としている。

Moffett は、肉食に関して、ノアとその家族が初めて動くものを食べるのを許されたが、動物を殺すことは冷酷な食肉解体屋 (屠殺業者) でもなければ耐えられないものである。それでも神が肉を食べることを許したのには理由があると述べ、その理由とは、健康に関係していると述べる。というのは、洪水前に人間の体は強健で植物も余分な水分がなかったが、洪水後には植物は栄養分が少なくなり、人間も病気になるようになったからだと答える (Fitzpatrick, 60)。

全体としては、標準的なエリザベス朝の見解は、肉を食べることは神が定めたことであり、残酷でなければ許されるものであり、また菜食よりも健康的であるというものである (Fitzpatrick, 61)。

以上を踏まえて、『お気に召すまま』におけるジェイクイーズの憂鬱と公爵への批判が黄金世界のイメージをどう変えるかを考察してみる。

4. ジェイクイーズは偽善者か？

Fitzpatrick が指摘するように、鹿のことを考えたときに、ジェイクイーズは狩りの残酷さよりも社会的秩序の侵犯にまずいらだつ (57)。しかし、ジェイクイーズはそれだけでなく、鹿への憐みを示し、動物に対して共感も寄せている。傷ついたため仲間から見捨てられた鹿への同情、公爵を篡奪者で動物を恐れさせて殺害すると批判するとき、動物の苦しみに気づいていると Fitzpatrick は指摘する。そうであれば、菜食主義を擁護するものと期待される (58)。

それについての Fitzpatrick の結論は、憂鬱質の人は、消化力が弱いので、肉のように消化されにくいものを避けた方がよいのだが、ジェイクイーズが憂鬱であるというのは、肉を食べていることの証になり、偽善者ということになる (61)。

しかし彼は本当に Fitzpatrick のいうように偽善者なのだろうか。

ジェイクイーズが偽善者かどうかという結論は、ジェイクイーズが肉を食べている場がないので、確証が持てるわけではない。

かつてのジェイクイーズはおそらく公爵が言うように、酒池肉林に溺れていたのだろう。ただ、今は

どうかというと、同じ場面の宴のところで、ジェイクイーズが果物を手にかける場面が出てくる。

ORLANDO. Forbear and eat no more!

JAQUES. Why, I have ate none yet.

.....

ORLANDO. ... But forbear, I say!

He dies that touches any of this fruit

Till I and my affairs are answered.

JAQUES. An you will not be answered with reason, I must die. (2.7.88-89, 98-101)

ここで催されている公爵の宴会が banquet (2.5.55) と呼ばれていることから、Oxford 版の注ではこの banquet が 'a course of sweet-meats, fruit, and wine' (OED sb.¹ 3) の意味で fruit, wine の light meal であることを支持している。理由はジェイクイーズが食べているのが fruit だからだ。Arden 版の注は、これに関し、少なくともパンくらのずっしりしたものがアダムを快復させるには必要だろうと指摘する。2 幕 1 場で狩りに出かけていることを考えれば、この宴会には、何か食事があってもおかしくない。もしかしたら鹿肉も供されているかもしれないが、肉が出ていると主張する批評家はなぜかいない。

Fitzpatrick は、おもてなし (feeding) がこの劇では共同体 (community)、人間性 (humanity) と同意語であり、この宴会には肉はなく、果物だけだろう、そのほうが公爵の gentleness に一致するからだ、と述べる(64)。一方で、Oxford 版は宴会の前の場面の venison (2.1.21) の注では、ここは鹿の意であるとしたうえで、(John) Harrington の venison "is a very melancholy meat" と言うのを引合いにだし、ジェイクイーズ以外はその影響を受けていないようだとして述べている。その前提は彼らが森で狩りをして肉を食べているということになる。

ならば、おもてなしのときだけ、肉を出さないで、gentleness を気取るといのは偽善にならないだろうか。動物を殺すことを排除するため、肉食はおもてなしでは封印されるのだろうか。この宴会が果物とワインだけだとしたら、それは、パストラルの黄金世界を演出したい公爵たちの仮の姿を映すようなみせかけの菜食主義になるだろう。

羊飼いは黄金時代を生きているかのように、狩りもせず、動物と共存し、彼らに草の餌を与えることを喜びとしていることは、公爵たちとの対比におい

て重要である。公爵たちは、あるときは黄金時代さながらに生活し、あるときは、狩りをして、篡奪者となっていることを楽しげに嘆く。彼らの偽善を暴き続けるのが、ジェイクイーズの役割である。

ただし、そのジェイクイーズ自身の批判の矛先は、オーランドーやロザリンドからうんざりされるほど自己中心的であり、もしも彼が肉を食べていれば、公爵同様の偽善者と呼ばれても仕方ない。実際に、彼は劇の最後で、森を離れて隠居人のもとに行く。パストラルの世界は似合わない。

この劇において、黄金世界としてのアーデンの森のイメージは様々に変容していく。そのなかで登場人物たちも様々な様相を見せていく。その矛盾に満ちた森のなかで、数々の試練を経て、各人は変容しながら、成長を遂げていくのである。悪人であったオリヴァーも森で再生して、自己を見つける。同じくフレデリック (Frederick) も森で隠居に会って自己を見つめ直す。そして、最後には、たとえ束の間であろうとも、結婚の神の登場とともに黄金時代のイメージで幕を閉じるのである。そのときには、ジェイクイーズの姿は消えている。彼もその役割を終えたのである。

注

- 1 シェイクスピアからの引用は、The Arden Shakespeare Series による。
- 2 ジェイクイーズの憂鬱と食事療法本に関する部分は日本英文学会中部支部第 69 回大会におけるシンポジウム『食卓のイギリス—エリザベス朝からロマン主義時代まで』(於福井大学、2017 年 10 月 28 日)で発表したことの一部をもとにして加筆修正したものである。そのときの発表概要については『日本英文学会第 90 回大会 Proceedings 付 2017 年度支部大会 Proceedings』(2018) 205-206 頁に掲載されているが、一部本稿と重複していることをお断りしておく。

引用文献

- Albala, Ken. *Eating Right in the Renaissance* (California Studies in Food and Culture Book 2). Kindle ed., U of California P, 2002.
- Elyot, Thomas. *The castell of health, corrected, and in some places augmented by the first author thereof, Sir Thomas Elyot Knight.*

- London, 1595. *Early English Books Online Text Creation Partnership*,
name.umdl.umich.edu/A21308.0001.001.
Accessed 17 May 2020.
- Fitzpatrick, Joan. *Food in Shakespeare: Early Modern Diets and the Plays*. Ashgate, 2007.
- Moffett, Thomas. *Healths improvement: or, Rules comprizing and discovering the nature, method, and manner of preparing all sorts of food used in this nation. Written by that ever famous Thomas Muffett, Doctor in Physick: corrected and enlarged by Christopher Bennet, Doctor in Physick, and fellow of the Colledg of Physitians in London*. London, 1655. *Early English Books Online Text Creation Partnership*,
name.umdl.umich.edu/A89219.0001.001.
Accessed 17 May 2020.
- Mullaney, Steven. *The Place of the Stage: License, Play and Power in Renaissance England*. U of Chicago P, 1988.
- Ovid. *Ovid's Metamorphoses*. 1567. Translated by Arthur Golding. Edited, with an Introduction and Notes by Madeleine Forey. Johns Hopkins UP, 2002.
- Shakespeare, William. *As You Like It*. Edited by Juliet Dusinberre. The Arden Shakespeare 3rd Series, Thomson Learning, 2006.
- . *As You Like It*. Edited by Alan Brissenden, Oxford Shakespeare, Oxford UP, 2008.
- . *The Complete Works of William Shakespeare*. Project Gutenberg, 2019,
www.gutenberg.org/files/100/100-0.txt.
Accessed 16 May 2020.
- The Geneva Bible: A Facsimile of the 1560 Edition*. Introduction by Lloyd E. Berry, Hendrickson, 2007.

(2020年5月20日受付)

(2020年7月15日受理)